

絵本「青のない国」やイラストについて話す安永則子さん(左)と長友啓典さん(右)＝港区で



「大切なもの」大人に問う絵本

「何が大切かは自分で決める」。そんなメッセージを込めた大人の「哲学」絵本「青のない国」が静かな人気を呼んでいる。出版したのは粕江市に事務所を構える元女性放送記者で、絵は大病を経験した大物グラフィック・デザイナーが描いた。絵本の原画展が二日から港区六本木で開かれる。絵本を出版した安永則子さん(四三)はTBSで警視庁や東京地検を担当した。三十三歳で結婚し、長女(六三)、長男(五三)を出産。複数のベビーシッターを頼み仕事をこなした。昨年二月退職、出版事務所を構えた。「テレビと絵本は、絵に言葉を添える」という意味で似たメディア。一人の出版

元女性記者、起業し出版「青のない国」原画展六本木

社ならいけると思った」と起業の経緯を明かす。「青のない国」は初めて手掛ける本。中年男が青色の花を見つけ、もてはやされるが、ほかの「青色の石」の出現で、価値を否定される。ほんろうされながらも「自分にとって何が大切か」を再確認する筋書きだ。構想を考え、絵本作家の風木一人さんに文章を依頼。絵は作家伊集院静氏などのさし絵で知られるグラフィック・デザイナー長友啓典さん(七五)に相談した。業界の大御所である長友さんが、出版を始めたばかりの安永さんの提案にかかわる気持ちになったのは、二〇一〇年に食道がんで大手術を経験し、価値観が変わったことが背景にあるという。

「若い人をライバル視してきたが、むしろ育てなさいかんなと思った」と長友さん。ブックデザイナーの松昭教さんも加わり絵本が完成。四月下旬に発売された。絵本はA5判で税込み千四百四円。原画は十三日まで、「六本木スペース・ピリオン」で三十点が展示される。入場無料。

(蒲敏哉)